

## キリスト道講演会

## 「神の思い」と「人の思い」(二)

——真に豊かな人生への道——

2010年1月31日(奈良 春日野荘)

国籍は天国、地上へ出張 聖霊による新生 五つのパンと二匹の魚 神さまの贈り物 キリスト受難の秘義 キリストを受け入れて天国へ行く 神の求め給うもの 天に宝を積む癒されて旅立ちたい 孫の旅立ち 失われた神の子 万のことに時あり 山上の説教 キリストとの直結関係 祈り

## 国籍は天国、地上へ出張

こんにちは。皆さん、よくおいでくださいました。

弘野慶次郎先生と私とは、もう40何年かのおつきあいになります。1964年に私はちようどドイツから帰ってきた時に、淑子さん——弘野先生の奥さんですけれども——と知り合いになることができました。それから、やはり女性の引力は強いもので、ご主人も私たちの群れに加わられるようになりました。ですからもう本当に40年をはるかに越えているわけです。弘野先生ご家族とは、

長い深い絆で結ばれているような間柄です。それで、さきほどは、皆さんにご案内してあるチラシの「講師の言葉」を読んでくださった。

《「わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり、わたしの道はあなたたちの道と異なる」と主は言われる」(イザヤ55:8)》

「主は憐れみ深く、恵みに富み、忍耐強く、慈しみは大きい。……天が地を超えて高いように、慈しみは主を畏れる人を超えて大きい。……父がその子を憐れむように、主は主を畏れる人を憐れんでくださる」(詩篇103:8~13)

旧約聖書の預言書や詩篇において、すでにこのように神の愛の思いが語られています。新約聖書のキリストにおいては、深い愛の心が、その言葉と業に溢れています。わたしたちは、その神髄に触れることなく、神の言葉、キリストの言葉やみ業を素通りしてしまっているのではないでしょうか。この講演会を通して、ほんものに触れていただきたいと願います。

とあります。このチラシは多分たくさん作って、たくさんの方にお配りくださったのだと思いますけれども、ここにお見えになっている方は、そのうちの何分の一か——まだまだ座席がたくさんあるけれども埋まらない——そのくらい、なかなか人の思いというのは、神さまの思いとはかけ離れている。神さまの方から、こんなご馳走を、こんな大事なものを差し出しておられるのに、人はそれに気づかない。

「何だキリスト教か、もういいよ」

と、そのくらいのことと終わっているのが一般の方ではないでしょうか。

「日本は仏教国、いや、日本は神の国だ。そんなヨーロッパから流れてくるようなものは結構だ」

と。グローバル時代とか、宇宙時代とか言いながら、ちょっと狭いのではないのでしょうか。そうでしょう。日本人もたくさん宇宙へ行つて来られました。向こうから還つてこられたら、

「いやあ、向こうは凄かったよ。向こうから見たら、やはり地球というのは可愛い、美しいんだよな」

と、いろいろなことを報告していただきます。皆さんはそれをすんなり受け入れていらつしやるでしょう。宇宙ステーションにはロシア人もおれば、アメリカ人も乗っています。みんな国際協力してやっているわけです。なのに、地上ではなぜ、

「キリスト教だ、仏教だ、何だかんだ。キリスト教は了簡が狭い」

とか、一国の指導者が言つてみたり、まあ実に哀れむべき状態だと私は思うけれども、いかがですか。それは一つはやはり、キリスト教の伝道をなされる方にも一端の責任はあると思う。

「キリスト教でなければいけません。他はみんなだめです」

と、なんとケチ臭いことを言っているのだらうと、私は思っています。神の思いと人の思いは全然ちがうんです。神さまは無条件にすべての人に生命いのちを与えたい、生命を生きてほしい、本当の生命

を味わってほしいと思つておられる。しかも、その生命は神さまだけがお持ちなんですよ。残念ながら、皆さん、どなたに聞いても、どんな学者であろうが、ノーベル賞受賞者であろうが、野球のイチロー選手であろうが、何であろうが、

「本当に永遠の生命をお持ちですか？」

と聞いたら、きつと答えられないですよ。

「えっ、永遠の生命とは何ですか？」

「いや、死んでも死なない生命、死んでからのちにもつと凄いとこで輝く生命のこと。」

そんなの、イチローさん、ありますか？」

「いえ、私は野球のことで今、一生懸命で、とてもとても、そこまでは考えておりません」

「では、まあしばらく待ちましよう」

とか。ノーベル賞であろうが何であろうが、それは全然関係ない。皆さん、一人ひとりが掛け替えのない人間ですよ。そこから出発します。一人ひとりが掛け替えのない人間です。

病院で、「あなたはノーベル賞受賞者で大事にしますよ」、「あなたは何？ 職業は何もない？ あとあと」と、そんなことを言つたら、大変なことになります。命というものは、どなたであろうと、本当に最大限に尊ばれるべきもので、差別はあつてはならない。

私の専門は法律の世界ですけれども、「法の下もとの平等」というのもそういうことなんです。「この人は大臣だから、ちょっと捕まえるのはやめよう」とか、そんなことはできない。法の下もとの平等と

いうのは、どんな人でも罪を犯したら、必ずそれに対する処遇を受けなければならない。横綱であろうが、幕下であろうが同じです。ただ国会会期中は逮捕されないという特権がありますから、これは法律でそう決めているから別ですけれども。そうでなければ、どなたさまでもやっばり犯罪の嫌疑があれば、法律に触れるようなことがあれば、調べなければならぬ。平等なんです。

ですから、命は本当に人の身分とか生い立ちとか、その他の、「あの人は立派なことをやってきた人だから、この人はこういうことにとつて大事な人だから」、特別にということとはあつてはならない。あるはずがない。命は等しく尊い。しかし、その命とは何ぞや。命とは何ですか。これは、我々自身の中から答えは出てこないと思います。みな、この地上という閉ざされた世界に生きていますから。そういたしますと、

「私は死んでから、皆さんはお亡くなりになってから、それからどこへ往くの？」  
と。誰も知らない。

「いや、仏さんのところへ往くんや。いや、キリストのところへ往くんや」

と、みなイメージは持っていますよ。イメージは持っているけれども、誰も往った人はいない。たまたま臨死体験で還つて来た人は、素晴らしいことを証言してくれています。それは信用するに値すると思えますけれども、それもほんのしばらくの間、往つて還つて来たんですから、本当の意味で永遠の無限の世界をととても語りつくせないと思います。

ということは、向こうから、向こうを本籍としてここへ出張して来てくれる人でないと、それは

語れない。当たり前のことですね。我々は地上の世界にいるときは、アメリカへ行っても、国籍は日本。出張してアメリカへ行きましたといつて見られるんですけども、誰も

「私は、国籍は天国で、地上へ出張してきました」  
なんて言えないでしょ。

旧約聖書の中にいろいろ預言者というのが出てきます。これは神さまの霊を受けて、「語れ！」という言葉を語らしてもらっているだけで、国籍は相変わらず地上なんです。国籍は地上人でありながら、たまたま神さまからの霊がくだつてきて、預言者を捕まえて

「さあ、これを語れ！」

「いやですよ」

「いや、語れ！」

と、無理やり語らされている。「語ればいいんですよ、語れば」なんてふてくされて、始めは語りだす。でも、神さまの霊に捕らえられたらもう——それはイザヤ書にもあります——イザヤは、

「私は唇の汚れた者です。私のような汚れた者は神さまのことをお伝えできません」

と。そうしたら、火焰天使が飛んできて、唇を焼け火箸で焼いたという幻を見た。

「もうお前は潔い、だから、語れ！」

「はい、語ります」

と。神さまのことを語るにしても、それだけ神さまに捕まえられて潔められて、

「さあ、お前はもう別人になったから、さあ、語れ！」  
 と。それで語るんです。それが旧約聖書の預言者の世界です。だから、イエス・キリストという方は本当に凄いですよ。国籍は天国ですよ。では、天国とはどこにあるんですか？

### 聖霊による新生

「人新たに生まれずば、神の国を見ることあたわず」  
 と、ヨハネの福音書に出てくる。

「人は新しく生まれなければ、神の国を見れない、入れない」

と。ニコデモという方はイスラエルの大学者で、指導者です。ところが、イエスというお方がどうも凄い方らしい。でも、表向き出かけて行ったらだめなんです。イスラエルの指導者が名もなきイエスの所へ訪ねて行って教えを乞うた、なんていうことになればとんでもない。だから、夜こっそり行つた。ヨハネ福音書の3章に出ています。夜こっそり行つて、

「先生、神さまがご一緒でないと、あなたがなさっているような素晴らしい御業は絶対にできっこありません」

と言つて、もちあげた。そしたら、イエスは何と仰つたか、

「人は新しく生まれなければ、神の国を見ることできない。人は水と霊から生まれなければ、神の国に入ることができない」

と。見ることも入ることも、みなこれは非常に動的でしょ、頭で考えている世界ではない。つらつらと見る、その中に入つて行く、実在のことなんです。その実在界から——我々は地上しか思っています。ところが、そのお方はこっちへ来たんですから——誰も見えない所からおりてきた。しかも、人の形をして降りてきた。でも、やっていらつしやるのが凄い。凄いの一字に尽きる。

「その秘密は何ですか、こっそり教えてちょうだいね」

と、こういうふう聞いたわけですよ。そしたら今言ったことが出てきているわけです。

これは皆さんにお配りしてあるプリントの、ヨハネ福音書3章「聖霊による新生」(ヨハネ3:1-8)というところに載っていますので読んでみましょう。

「さて、ファリサイ派に属する、ニコデモという人がいた。ユダヤ人たちの議員であつた。ある夜、イエスのもとに来て言った。「ラビ、わたしもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行つことはできないからです。」イエスは答えて言われた。「はつきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」

いきなり、そんな「人新たに生まれなければ」なんてことを言われても、

「私はもう年寄りの後期高齢者なんです。そんなのは無理ですよ、新たに生まれるなんて」。皆さんは笑われるけれども、そのとおりのことを言っているんですよ。



4 ニコデモは言った。「年をとった者が、どうして生まれることができましょう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか。」イエスはお答えに入ることにはできない。「肉から生まれたものは肉である。」

我々は「肉から生まれたもの」ですね、肉体の誕生をしましたから。

霊から生まれたものは霊である。7 『あなたがたは新たに生まれねばならない』とあなたに言ったことに、驚いてはならない。8 風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。』(ヨハネ3:1-8)

これは完全に私たちの日常の理解を超えた次元からの言葉ですよ。しかも、イエスというお方はそこから来られて来られた方ですから、本籍は天国なんですから、天国から地上に出張して来られた。そしてまた天に戻って行かれるんです、還かえって行かれる。このイエスという方は、ニコデモさんがこうやって真剣に質問するものですから、こんなふうに誠実にお答えになった。けれども、ニコデモさんは全くわからないわけです。

「何のこっちゃ、これは?」風は思いのままに吹く。それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。』なんて、千の風に乗ってかな?」

なんて、今の人だったなら思うかも知れません(笑)。「私は風のように自由です」と、あの歌は素

晴らしいけれども、やっぱり新しく生まれなければ、あの歌のとおりになろうと思った。それは生まれるといっても、死んでからだったら、つまらないですよ。地上にいる間に既に生まれて、地上に居る間に既に新しく生まれて、新しい生き方をさせてもらって、お役を果たし終えたら、向こうの本ものの世界に今度は迎えていただく、これでないとな。

「死んだ時が新しく生まれるときです」

というなら、

「だったら、死ぬまで何しているの?」

ということになっちゃいますよ。だから、このキリストが語っておられることは、正に我々この地上に、娑婆しゃばに生きている人間に本当の生命を与えることです。「註:『千の風になって』の歌詞。『私のお墓の前で泣かないでください』そこに私はいません／眠ってなんかいません／千の風に／千の風になって／あの大きな空を／吹きわたっています」

## 五つのパンと二匹の魚

この世は今、惨憺たるものです。けれども、今だけではないですよ。歴史上、非常に満ち足りた時代というのは少なかつたと思う。満ち足りている時代はろくなことがないですよ、元禄時代であれ、頼朝なんですよ。武士道は、むしろ苦しいときの方が本ものが芽生えてくる。鎌倉時代がそうですね。鎌倉仏教もそうです。このイエスが生きておられたときも本当に貧しい時代でした。その中で本当

の生命が現れてきた。暗闇の中にポツと花が咲いてきた。それがイエスだったんですね。ですから、皆さん、今はこんな不景気な時代で、

「食べるものもない、働く場所もない、そんな人間にキリストのことを語ってくれなくて結構だ。食をください」

「わかるよ、けれどもね、それでは豊かになったら、あんた、求めるか？」

「いや、豊かになったら、要りません」

と。これが人間でしょ。ヨハネ伝の中に、「五つのパンと二匹の魚で五千人の人を養われた」という場面がある。これはマタイもマルコもルカにもみんな出てくる。ヨハネにも出てくる。「男だけ数えて五千人いた」というんですから、女性たちや子供を入れたら一万人にもなるという大群衆です。それがお腹がへって、夕暮時で寂しい所で、どうしようかと。弟子たちに聞かれても、「いや、どうにもなりません」と。子供がきて、

「お母さんが持たしてくれたパンがあります、五つの大麦パンと二匹の魚があります。これを使つてちょうだい」

と言つて、差し出した。そしたら、イエスはそれを取つて祈られた。それでお渡しになると、不思議に減らないんですよ。

「減らない」という話は旧約聖書の中の「列王紀略」に出てきます。エリヤという凄い預言者がザレパテの寡婦の所へ行つて、その寡婦と息子は飢え死にかかっている、それをつかまえて、奇蹟を

やる。

「壺の中の油が、いくら汲んでも汲んでも減らなかつた」

という奇蹟がちゃんと旧約聖書に出ています（列王記略上17・8、16）。エリヤそれからそのお弟子のエリシャとか、そういう特別な人は特別なことをさせられている。

イエスという方は本当に天からくだつてきた。そして、五つのパンと二匹の魚で満足させられました。ヨハネ伝6章に出てくる。そしたら、何と群衆は「この人を捕まえて、王様にしよう。食糧問題は解決ですよ」と。イエスは逃げて行かれたと書いてある。そして山にこっそり隠れて祈つておられた。そのくらいに人が思っているのはパンです。一生困らないパンがほしい。一生困らない食がほしい。ところが、イエスという方はそんな次元ではなく、

「このパンを食べたつてまたお腹がへる。そしてその繰り返しをして、70、80、90歳になつたらもう終わり。それであなたたち、いいの？ 神さまはもつともつと凄いものをあなた方に差し出そうとして、私をこうやって出張させてくださったのに、出張命令をもらつて来ているのに」

と。パスポートは、残念ながら、地上では通用しない。「証明しろ！」と、ユダヤ人たちがイエスに追及する。

「神さまが私のことを証明してください。私は神さまによつて、『せよ』と言われたことをやっている、奇蹟の業を。この二つでどうだい、あかんか？」

と。そんなことがヨハネの福音書にずっと出てくる。ものすごく楽しいですよ、ヨハネの福音書をお読みになったら。時代はユダヤの頃です。ユダヤ人と宗教家たち、それに振り回される群衆たち、それとイエスです。イエスはたった一人です。弟子どもはいますけれども、頼りない。なにせ直弟子たちの出身は漁師ですから、大事な時は頼りない。

イエスさまは、「ニコデモみたいな人にもそんなことを仰る。完全に向こうは狼狽ろうばいして、「参りました!」(降参しました)」というわけでスゴスゴと帰っていくような次第です。そのイエスがパンの奇蹟をなさったら、捕まえて王様にしようとする。それでイエスは山に逃れていく。山で祈っておられる。弟子たちは先に帰る。湖の途中で弟子たちは嵐にあつて舟が進めない。そしたら、

「夜明けの4時頃、イエスは湖の上を歩いて来られた」

と書いてある。弟子たちの舟に近づいて来られる。「私だよ!」と。弟子たちはおったまげる。そういう場面が出てくるでしょ。神学者は、これを「復活されたイエスが歩いてこられた」と、読み替えている。神学者という方々はとても賢い方ですから、頭で理解しようとなさるから、「そんな肉体のイエスが湖上を、波の上を歩いて来られるはずがない」とお考えになる。私はそう考えない。イエスほどの方が、国籍は天でしょ、天からおりてきた方が、祈れば霊化れいかしますよ、本当に。ある時、祈っておられたら、

「まばゆい姿に変わられて、エリヤとモーセが現れてきた」

と書いてある。ペテロとヤコブとヨハネの三人がいたが、もうおったまげて、

「こんな素晴らしい所に、ここに小屋を三つ作りましょう。そして永遠に一緒に住みましよう。一つはあなたのために、一つはエリヤ、一つはモーセのために」

と、何を言っているかわからない、というのが出てくる。ルカ福音書の9章あたりに出てきます。そのようにまばゆい姿になる。

だから、イエスという方は本当に国籍は天でしょ。神さまから出てきた方でしょ。祈っておられたら、そのくらいに変貌されて当たり前なんです。水の上をしらずと歩いてこられても、不思議でも何でもない。私はそう思っている。でも、証明不可能ですけども。私はそのくらいのお方だと思ってるんです、イエスというのは。全人類の罪を背負って、それで十字架で死んで、どこいその後現れてきた。死体もなかった、どこにも。そして今度は4日後、弟子たちに言われた、

「お前さんたちは祈っていらっしやい。そしたら今度は、聖霊となってお前たちにくっつくから」

と天へ昇って行かれた。それから10日後に、祈っていた弟子たちに火の如きものが降くだってきて、そして弟子たちは生まれ変わったという、使徒たちの伝道の記録があります。新約聖書の「使徒言行録」という所に出できます。

### 神さまの贈り物

それからの弟子たちは、本当に見違えるような別人のようになって働きます。イエスという方が

乗り移ったら、凄いことが起こりますよ、誰だって。そういう凄い世界を私たちは本当に体験する。  
「なるほど、そんな凄い世界があるの!? これは地上におったら、わからんわ」

と。地上でどんなにもがいてみても、地上から向こうを見てたらわからん。向こうから出てきた人間だけが証言しているわけです。いくら、

「これは本当だよ、よくよくあなたに言っておく」

と言つても、わからん。これが人間ですわ、皮がむけないと。一皮むけ、二皮むけ、脱皮しないと。セミだってそうでしょ。地中のセミが脱皮して、ポカッと割れて、きれいな姿になって空中を飛び回って、「シャン、シャン、シャン」と真夏になったら鳴いています。私はあのセミにもお願いしたい。「二週間の命を終わった時に天界へ行つてね」と。地中にいて空中にきて、あのように盛んに命して二週間鳴き叫んで——あれは命の喜びを語っていると思う——終わった時に、もういつぱん地上へ戻るのには可哀相だ。亡骸は地上にあるけれども、

「セミの魂はきつと天国へ行っているだろう。天国で会いたいね、セミさん！」  
と、そういう気持ちです。

キリストのこゝを受けとるようになったら、もの見方が変わってくる、すべてのものに対する見方が。今までは地上の事だけの見方で見てきたけれども、向こうが開けて、向こうの光がズーツと差し込んでくると、全然違う。山々だって輝いて見える。自然を見ましても、命しているんですよ。人間だけがしょぼんとしている。人間だけうつむいている。皆さん、セミに負けたらあか

んですよ(笑)。でも、自分からやせ我慢で頑張っても絶対出てこない。だから、「あげよう！」という、これが神さまの贈り物なんです。

「これだよ、イエス・キリストという方をあなた方に差し出すから、この方を受けとりなさい。その方と本当に霊において、心において、内的に一つになったら、みかけは同じだけれども、中味は変わっているよ」

と。これが「新しく生まれる」ということ。それは神さまだけがやってくくださるんです。我々ほんなに修行を積んだつて、新しく生まれられない。

日本でも「千日回峰行」とか、いろんな仏教の修行をなさる方があります。私はそんなことをやってませんから、そのお方に聞かねばなりませんけれども、「何か変わりましたか？」と、テレビの中で質問されたら、「いえ、何も変わりません、前と一緒や」と言っていましたよ(笑)。でも凄い修行をなさる。「阿闍梨様」とかいつて尊ばれます。「註：千日回峰行とは、滋賀県と京都府にまたがる比叡山山内で行われる、天台宗の回峰行の一つである。満行者は「北嶺大先達大行満大阿闍梨」と称される」

我々の世界は何も要らん。そのままがいい。病の方なら寝たつきりでもいい。どこにでもキリストは来てくださる。「心だよ、心だよ」と。我々はがんじがらめに自分で心を鎖とくしているんですよ。

「狭い門から入れ」

と仰つてますけれども、自分が鍵かけて鎖している。キリストがトントンと戸を叩いて、「さあ、私だよ、扉を開けて！」



と。開けたら、サーッと入って来てくださる。

「こんな汚れた人間にあなたが入ってきたら、もつたいないです」

「いや、私ともうあなたを清くした。十字架の血潮で洗った」と仰ってください。

### キリスト受難の秘義

これがイザヤ書53章の「キリスト受難の秘義」(イザヤ53:1-12)というところですよ。イザヤという預言者は、誰のことを預言しているのか本人はわからないんです。わからないけれども、紀元前何百年か前にこういう預言をしている。本当にこれは誰のことを言っているのか、預言している人自身がわからない。ただ、イエスという方は、これは自分について書かれている預言だというふう

に受けとられた。

「わたしたちの聞いたことを、誰が信じえようか。主(神さま)は御腕の力を誰に示されたことがあるうか。乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように、この人は主の前に育った。見るべき面影はなく、輝かしい風格も、好ましい容姿もない。

イエスはもつと輝かしかつたと思うんですけれども、こんなふうに預言されている。

彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている。

正に十字架にかけられるあのイエスの姿を思い浮かべてください。人に叩かれ、唾きせられ、鞭打

たれ、<sup>さいた</sup>惨憺たる姿です。

彼はわたしたちに顔を隠し、わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。

と、その当時の人たちは。ところが、

4 彼が担ったのはわたしたちの病、彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに、わたしたちは思っていた、神の手にかかり、打たれたから、彼は苦しんでいるのだ、と。十字架の姿はそうですよ。人々はあれだけ恵みを受けていながら、宗教家たちに<sup>そそのか</sup>唆されて、

「バラバという強盗殺人の囚人を赦せ、イエスを十字架につけろ！」

と。ローマの総督ピラトは赦したくしようがなかった。ピラトは責任をとらなければならぬ。宗教に関わりはない。治安維持だけが目的なんです。治安が乱れたら、ピラトは責任をとらなければならぬ。だから、何とか<sup>おんひん</sup>穩便に、

「あなた方は<sup>すきこし</sup>過越の祭の時は、どんな重い罪の人でも赦してやるではないか。どうだ、このイエスを赦したらどうだ？」

「だめだ、バラバをゆるせ！」

「なら、お前たちは責任をとってくれるのか？」

「その血の責任は私たちがとる！」

と言って叫んだ。

「十字架につけろ、十字架につけろ！」

と、騒然としたので、このまま放っておけば、騒乱罪になってしまうということで、「それでは、仕方がない」

と言って引き渡した。ユダヤ人たちには死刑の権限がなかった。死刑をやるうと思ったら、ローマの許しを得ないといけない。ピラトは、これは宗教上の争いだ。宗教問題は裁判にかからないですよ、今でもそうです。宗教は宗教の内部でやってください。でも仕方がないので引き渡した。それで、人々はこう思ったと書いてあります。

<sup>5</sup> 彼が刺し貫かれたのは、わたしたちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのは、わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、

この「平和」は「平安」ですね、安らかさです。

彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。

本質的には私たちは、心の傷も、心の痛みも全部いやしていただいた。

<sup>6</sup> わたしたちは羊の群れ、道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて、主は彼に負わせられた。(イザヤ53:1-6)

「罪」といいますね、キリスト教は「罪、罪、罪」といって、嫌がられるんですよ。

「悔改めなさい、あなたは罪を犯したでしょう。毎晩、寝る前に悔改めなさい」

なんて言われると、しょぼんとしてくる。そうではないですよ。神さまに逆らっているという姿が

罪なんです。人間はみんなそうなんです。生まれてきた人間はみんな自律心があります。プライドがあります。「神さまなんかくそくらえ」と思っているでしょ。それが罪なんです。わからないんです。神さま側から見たら、

「こんなにもあなた方のことを愛して、あなた方のために善かれと思っっているのに、全然受けつけてくれない。悲しいね、寂しいね」

と。孤独ですわ、イエスさまは。最後には、弟子たちも捨てました。たった独りです。十字架にかかった。そして、十字架の上で何と言われたか。

「父よ、彼らを赦してやってください。自分たちのやっていることがわからないからです。彼らを赦してやってください」

と。そして、

「私の霊を聖手に委ねます」

と。その姿だけでも、私は首を垂れます。

キリストを受け入れて天国へ行く

「キリスト教とは、敵を愛さねばなりません。左の頬を打たれたら右の頬を出さなければいけませんか」

とか、そんなことはどうでもいい。とにかく、キリストは仰ったとおりのことをやっておられる。我々

は自分のために善くしてくれるものは大事にします。でも、そうでないものは徹底的にやっつけます。これが我々の正義感ですよ。そうでしょ。

「殴られて、殴られっぱなしなんて、そんなバカなことがあるか」

と。これが我々の正義感です。ところが、キリストは、

「殴った奴は可哀相な奴だ。殴らねばならんという根性は可哀相だ。彼らを救ってやらな  
いといかん」

と。全然レベルがちがう。弱虫ではない、本当に強いんですよ、キリストは。

「人を憎んだり、貶めたり、殴ったり、そんなことしかできない奴は哀れな奴だ。そんな者は神の国には入れない。本当に神の国に、愛の国へ入れるのは、神さまと同じ心根のものでないと入れない」

と。これは天然法則でしょ。似た者同志です。神さまに似た者が神さまの所へ行く。サタンに似た者がサタンのところへ行く。ヨハネの福音書に出てくるけれども、またユダヤ人との問答があつて、

「私の父は神さまだ。あなた方ユダヤ人は『アブラハムが先祖だ』と言っているけれども、そのアブラハムが先祖だと言いなから、私を殺そうとしているではないか」

と。本当に殺そうとしている。イエスがなさった善い業を全部、それを「けしからん！」と言う。何でけしからんか、

「彼は神の名をかたる悪い奴だ。『私を見た者は父を見た』と言う、あいつは神と自分を同

じと、神と等しくしている。冒瀆罪だ」

と。安息日に人をいやされたら、「安息日違反だ。これは死刑に値する」と、そういう判断です。イエスは言われた、

「神さまは人を助けたい、生命づきたい。安息日に苦しんでいる人がいたら、放っておけないではないか。神さまは今でも働いていらつしやる。生命を与え給う神さまは、『せよ』と私の中で仰ったから、病める人に手を按いて癒した。そのどこがいかなの？ 私は自分でやってない。神さまの命令とおりにやっている」

「けしからん、けしからん、ますますけしからん！」

と言って彼らはイエスを殺そうとした。ヨハネ伝5章に出できます。そのくらい「神の思い」と「人の思い」は違います。同じ聖書を經典としていながら、その受けとり方が全然逆なんです。そういう、神さまの御思いをそのまますりなり受けられない人間の性、これが「罪」という。「原罪」とかいいますね。理屈ではなくて、事実なんです。誰もこの地上の人間はそのまま、

「私は神の子です、私の中には神さまがいっぱいいます。神の性質ですよ。死んだら、すつと向こうへ行けるのは当たり前です」

と、そんなことを誰も言えません。「ちよつと待った、証明書を見せて」と。天国へのパスポートなんて誰も持っていない。それで、あきらめていたんです、人間はみんな。「死んだら、お墓に行くものや」と。それである「千の風」という歌が生まれてきたけれども。

「そうではないよ、千の風になって飛ぶんだ。お墓の中に眠っていませんよ」

と、希望を与えてくれる。その秘密はどこにあるか。キリストがそれをやってくださらないと、イメージだけではどうにもなりません。キリストという方は、そういう私たちのどうしようもないものを全部、背負いきった。それがさっきの、

「我々は、道を誤って、それぞれの自分勝手な方向に向かって行った。」「私はわが道を行こう」と、立派なんですよ。

「私が道を行かん。私は自分の意志で行く。自分で自分の道を決められないような弱虫はだめだ。自己決定だ」

と言う。でも、自己決定が本当に正しい道ならいいけれども、奈落の底へころがりこんでいく道を正しいと思ひこむことだっていくらでもありますから。そういった一番大事な神さまを蹴飛ばしているようなその罪、それをよりによつて、キリストに負わせられる。そんな無茶な話がありますか。冤罪もいいところではないですか。人の罪を全部ひつかぶっているんです。神さまがそうなさった。

苦役を課せられて、かがみ込み、彼は口を開かなかつた。屠り場に引かれる小羊のよう<sup>7</sup>に、毛を切る者の前に物を言わない羊のように、彼は口を開かなかつた。

この十字架の場面はずっと福音書に詳しく出てます。ゲッセマネという所で真剣に祈られた。

「お父さま、本当に私が十字架を負わねばなりませんか。これが本当に御意<sup>8</sup>でしょうか。本当に今がその時なんでしょうか。はつきりとお答えください」

と、苦しんで祈られた。でも、「そうだ」ということがはつきりした。そこで決然と立ち上がられた。もう一切、迷いなし。そしてもう、誰とも話をなさらなかつた。ピラトの前であろうが、どなたの前であろうが、イエスはほとんど沈黙を守っておられます。言い訳をしたってしょうがないというわけでしょう。だから、彼は口を開かなかつた。

捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか、わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり、命ある者の地から断たれたことを。彼は不法を働かず、その口に偽りもなかつたのに、その墓は神に逆らつた者と共にされ、富める者と共に葬られた。

だいいち「富める者」というのは傲慢ですから。まともに真面目に働いていて富がたくさん蓄積するというのは、この時代にも多分なかつたんでしょう。だから、「富める者」というのは、どこか何か変なところがあったのではないでしようかね。「神に逆らう者」と「富める者」が同格に扱われています。そういうものたちと一緒にされたという。

病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ、彼は自らを償いの献げ物とした。彼は、子孫が未永く続くのを見る。主の望まれることは、彼の手によって成し遂げられる。

彼は自らの苦しみの実りを見、それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために、彼らの罪を自ら負った。それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし、彼は戦利品としておびただしい人を受ける。



イエス・キリストを受け入れて、天国へ行く人が続々と現れてくるということでしょう。

彼が自らをなげうち、死んで、罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人の過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのは、この人であった。」(イザヤ53・6～12)

凄いでしょ。イエスがおいでになる何百年も前に、預言者は誰のことを言っているのかわからなくて、こういう預言をしている。イエスという方は、これを自分について書かれている預言としてお受け取りになった。そのとおりの道を歩まれた。

### 神の求め給うもの

ついでに、ミカ書の6章「神の求め給うもの」(ミカ6・6～8)とこののを見ておきましょう。

「何をもって、わたしは主の御前に出で、いと高き神にぬかずくべきか。焼き尽くす献げ物として、当歳(満一歳)の子牛をもって御前に出るべきか。主は喜ばれるだろうか、幾千の雄羊、幾万の油の流れを。

こんなものを献げ物にして、主は喜んでくださるのだろうか。あるいは、子供を犠牲にして献げべきなのか。昔はあったんですよ、身内のものを犠牲に献げるといのが。

わが咎を償うために長子を、自分の罪のために胎の実をささげるべきか。人よ、何が善であり、主が何を御前に求めておられるかは、お前に告げられている。正義を行い、慈しみを愛し、へりくだって神と共に歩むこと、これである。」(ミカ6・6～8)

「正義を行い」というのは、いわゆるこの世的な正義、人間が考えた正義ではありません。神さまの御意にかなって歩むことが「正義」「義」なんです。神の御意にかなう道が義の道なんです。これはキリストしかできなかった。ユダヤ人たちはみんなが自分を、神の道を歩んでいると信じていた。でも、やったことはキリストを殺すことだった。それに帰結しました。

新約聖書の後半にパウロの書簡がある。パウロ(サウロ)は本当にキリスト迫害の急先鋒でした。ユダヤ人の律法のチャンピオンがイエス・キリストを迫害して、大祭司から添え文をもらって、ダマスコにいるクリスチャンたちをひっ捕らえるために馳せ参じて行った。その途中で光に撃たれて、ぶっ倒された。

「あなたはどなたですか!？」

「お前が迫害するイエスである。弟子たちに対する迫害は私に対する迫害だ!」

と。それでパウロはそこで光に撃たれて、目が見えなくなつた。ものが言えなくなつた。三日間、絶食した。完全に打ちのめされた。そしたら、ダマスコにアナニヤという人がいて、その人にキリストのお示しがあった。

「サウロという若者が今、祈っている。サウロの所に行つて、手を按いてやってほしい」

「いえ、とんでもない。あのサウロというのは恐ろしい奴ですよ。あれにかかったら、ひとたまりもありません。みんなブルブル震えているくらの恐い人ですよ」

「いや、そうではない。サウロは祈っている。アナニヤよ、お前さんが行くということを

ちゃんとサウロに示してやったから、行ってやれ」

と。そして、アナニヤが行って手を按おいて、

「兄弟サウロよ、あなたがこちらへ来る道すがら出会ったイエスという方が私をお遣つかわしになった」

と、「イエスの御名みなによって」と言つて手を按おいたら、「目から鱗うろこの如きもの落ちたり」と目が開かれた。そして食事して元気になった。

「イエス・キリストは主である!」

とすぐに言い出したのは凄い。これは物凄い転換です。だから、「あいつは裏切り者だ!」というこ  
とで、パウロは命をずつと狙ねらわれました。でも、「それは望むところだ」とパウロは言いました。

「死刑で当たり前の人間をキリストはお用いくださいました。命を与えてくださいました。そして  
一番弟子に加えていただいた。こんな有り難いことはない」

と言つて、パウロは喜びつつ伝道して行きました、地中海世界を。

「私の血を注ぐことを私は最大の喜びとする」

と、熾さかんなるパウロになりました。それは全部、本当の話です。復活されたキリストがそのように  
パウロに乗り移ったわけです。それは何も昔の話ではない。今もありありと、「はい!」と言つて受  
けとる者には全部、それと同じようにしてくださるんです。現れ方は様々ですよ。異言はなはしが迷まり出  
るというような人もあります。私には何もありませんでした。私は異言なんて何もない。全身しびれ

てぶつ倒れるということもなかった。何もありません。でも、年々深くなってきた。

「私の語った言葉は霊であり生命いのちである。肉は役に立たない。本当に人を生かすのは霊で  
ある。肉から生まれた者は肉だ。霊から生まれなければだめだ。霊によって霊の誕生をし  
なさい」

と。イエスの言葉というのは、単なる言葉ではだめです。言葉の中に生命がこもっている。力がこ  
もっている。ですから、さつき、

「天から降くだつてきて、空しく天へ戻らない。ちゃんと仕事をしてから天へ帰っていく」

とありました。キリストは正に地上でもの凄いことをしてくださった。そして、御業みわざを終えて天に  
帰って行かれた。そういう証言の書が福音書なんです。ですから、先人觀を捨て去って、神学者が  
何を言おうが、偉い先生方が何を言おうが、そんなことは度外視して、一人の人間、一人の生ける  
魂となつて福音書を読むことです。

我々は生命が欲しい。本当のことを知りたい。本当のものが欲しい。それほどを捜しても地上  
にはない。天からだけ降くだってくる。天の方かただけがそれをわかち与える。キリストは正に自分の体からだを  
引き裂いて――五つのパンを引き裂かれて五千人の人を満みたしたように――イエスのご自身の体を  
引き裂かれて、無限無量に人々の口の中へ、お腹なかの中へ入いり込んでいく。血潮が入いり込んでいく。そして生  
けるものとなる。そういう世界です。実験してください。これはご自身の体験でしか確かめられま  
せん。

しかも、皆さん、地上で高齢化社会だから、100歳まで生きれると思うと、大間違いです。ある人は早く亡くなります。期限は120歳という終わりが決められているけれども、そこまで大丈夫だという保証は何もない。若くして死ぬ人もあります。この世相です。どんな災禍わざわいがふりかかってくるかわからない。「いつまでもあると思うな親と金」とか、お寺の掲示板に書いてありました。孝行しようと思った時にはもう親はないということですね。親どころか皆さん一人ひとり、いつまでという保証は何もない。最大限では120歳ということなんです。ギネスブックで今は117、118歳ですが、そこまで行ってませんか。まだ120歳まで生きた人はないですよ。そうですね。だから、最大そこまで言われているだけで、早いのは明日かもわからない。

「いつ何があっても大丈夫です、私は既に永遠の生命をいただきました」と言えるようにしてあげるといのがイエス・キリストの約束なんですから、こんな約束を受けとらなかつたら損ですよ、ほんまに損ですよ。

天に宝を積む

「汝ら、宝を天あまに貯たくわえよ」

と、今日のプリントにも出てくる。

「天に宝を積む。あなた方の宝のある所に心もあるんだ」

と。宝くじを買ってタンスにしまつて、あんなのが当たつたら大変ですよ。人が続々と詰めかけて、

「あなたは当たつたんでしょ、金貸して！」と言つてきて、それでノイローゼになってしまいますよ。そして、どこへしまつてよいかと悩む。空き巣は五分で見つけ出すそうですね(笑)。マタイ伝6章で、

「天に宝を貯えよ」

とキリストは言われた。地上はあぶないですよ、無くなつていきます。だから、天に宝を積めと。「でも、それでおまんまを食べられるんですか？」と。それに対して、

「まず神さまを求めなさい。神さまの御国みくにを求めなさい。そうしたら、必要なものは全部添えて与えられるから大丈夫だよ。あなた方を飢えさせはしない」

と言われた。「どこに保証が有るんですか？」と人はいうけれども。

イエスという方は、すごいでしょ。大工の子供として生まれたということはおわかってる。クリスマスとは、あのクリスマスマスの物語に出ますから、一応従つておいて結構でしょう。でも、その他はわからない。12歳の頃に、エルサレムの神殿にいて、なにか学者たちと問答して、負けなかつたという話はちよこつと出ている。そこからあと30歳の伝道まで何もわからない。多分、親孝行のお方ですから、大工の息子としていろいろ働かれたでしょう。旧約聖書をご自分で読まれたのだと思います。そして、洗礼のヨハネが現れて、みんなに悔い改めのバプテスマをやつた。

「今に神の審判がくる。恐ろしい審判がくる。お前たちみんなはひとたまりもない。さあ、悔い改めろ。たくさん金をむしり取つたら、返してやれ！」

と、そういう話が出てくるでしょ。「洗礼のヨハネはラクダの毛皮を着て、野蜜とイナゴで食を養っていた」と書いてある。そこへ、ヒヨコヒヨコ、ヒヨコヒヨコと歩いてきたのがイエスでしょ。

「私にも洗礼を受けさせて」

と言われた。びっくりしたのはヨハネですよ。

「あなたこそ聖霊でバプテスマをなさる方なのに、水のバプテスマはとてできません」

「いや、私は受けたい」

と。なにも自分を特別扱いになさらない。そしてヨルダン川の水に身を浸された。上がってこれたら、天から聖霊が鳩のように降<sup>くだ</sup>ってきた。

「これこそ私の心にかなうもの。私はお前を喜んでいる！」

という御声<sup>みこゑ</sup>があった。ヨハネは何千人にも水の洗礼をやりましたが、誰もそんなことは起きなかった。このイエスという方にだけ天から聖霊<sup>せいれい</sup>が鳩のごとく降<sup>くだ</sup>ってきた。

「この方こそ神から遣<sup>つか</sup>わされた世の罪を除く神の小羊だ」

とはつきり、ヨハネは語りました。ところが、そのイエスは聖霊をいっぱい受けたから、さあ伝道かというところ、そうじゃない。まず御霊に導かれて荒野に行かれた。

「四十日四十夜、悪魔に試みられるためである」

と書いてある。その時、サタンという悪いやつが来た。そこに軽石みたいな石ころがころがっている。それが非常にパンに似ているから、

「これをパンに変えてみる。お前は神の子ではないか」

と。イエスは、

「人が生きるのにはパンだけではない。神の御口<sup>みくち</sup>から出る一つ一つの言葉で生きる」

とはつきり仰った。人々は、

「パンがなかったら、ひもじいから、私は神さまを今、求めてもむだです。神さまを求めていけば、パンの問題は大丈夫なんですか!？」と訊<sup>き</sup>ねた。

誰もそれに答えられない。イエスは、

「私はそれを突き抜けてきた」

と。そして、あのように、五千人の人を五つのパンと二匹の魚で養った。

「本気で私の所へ来てごらん。本気で私の所へぶつかって来てごらん。必ず大丈夫だから」

と。人間の命というのは不思議なんですね。40日間、雪の中に閉ざされて生き返った人がいるという。それから、こないだ15日間、地下に閉じ込められて——普通は72時間といわれているのをはるかに超えて——救出された人がいるんです。空間ができていたから大丈夫だったとかいう。人間の命というの、自然の命でさえ、このように不思議なんです。もちろん飲まず食わずですよ。

学者は、「四十日四十夜」とあるのは、聖書は「四十」という数字が好きだから、書いているんだろうぐらいにしか思っていない。私は「四十日四十夜」だと思ってます。インドのサンダーシングという方は素晴らしい方で——今世紀の方ですよ——そのサンダーシングは何回かその「四十日



「四十夜」をやった。その方はやっぱり自分でキリストと同じ体験をしたいと思いついて、断食をやられた。ですから、「四十日四十夜」というのは決して誇張でも何でもありません。

とにかく、そういう体験をなさった。それから今度は、サタンはイエスを宮の頂ぎに連れて行った。

「さあ、飛び下りてみる！ 天使がサツと現れて、あなたを守る。ちゃんと聖書に約束されてる。だから、やってごらん。白昼、みんなのいる所でやったらみんなびっくりして、

あなたについてくるから」と。イエスは、

「神を試みてはならないと書いてある」

と。足を滑らせた時に、守っていただけでしょ。けれども、「さあ、飛び下りろ、神さまが助けてくださる」なんて、そんなことはとんでもない。ここをクリスチャンは間違えないでください。クリスチャンは神さまに守られているからと言って、9階の屋上から飛び下りたら、とんでもないですよ。そんなことしたらだめですよ。足を滑らせた時に、何か運よく下のネットにひっかかって助かったとか、そんなことはクリスチャンでなくても、時々、子供さんなんかの場合にありますけれども。絶対、試みてやってはいけません。

「見ずして信ずるものは幸いである」

と。聖言を「然り」として「はいっ」と受けとる。この頃、何でも証拠を求める。プロポーズでも、愛しているよ。結婚しよう」

「証拠をみせて。まずお金を積んでくれなくては。一生幸せにしてくれる証拠をみせて」  
そんな結婚はだめですよ。

「ひもじくても、何でも二人で一緒にやりましょう」

という、二人の心が大事です。ましてや、神さまがついておられる。イエスがついている。そういう、体当たりでイエスさまに、

「あなたは本当に一つにしてください。新しい生命をください」という。これは、イエスさまは喜ばれますよ。

癒されて旅立ちたい

なかなか、人間は体当たりしていくのが惜しいから、今のポジションを失いたくない。今の幸せな境遇を失いたくない。だから、ガードしているんです。富める者だとか、高い地位の人だとか、学識の豊かな人、それぞれ自分に「これだけは私のもの」というものを持っている人はだめなんです。

「幸いなるかな、貧しき者」と言われる。

「何も持っていません。私は何もありません」

と。親鸞さんもそうでしょ。

「私は地獄必定の身だ。弥陀の本願だけが私を救ってください。法然さんがそう言うてく

れる。私は法然さんの教えに従っていく」

「もし、ウソだったらどうするの?」

「どうするもこうするもない。私は放っておけば地獄なんだ、地獄必定の身だ。こんな自分に何の希望もない。完全に締め出されている。ところが、弥陀の本願が私を救い上げてくださる。こんな有り難いことはない。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

という。念仏を称えながら祈りこんでおられる。そうしたら、仏の力が働くでしょ。だから、捨てたくないものをいっぱいガードしている人はなかなか入れない。

「富める者が神の国に入るよりも、ラクダが針の穴を通る方がやさしい」

なんて言われた。「針の穴」という背の低い門があったそうです。ラクダはコブがありますから、じやまになって入れない。「富める者は気の毒だね」と言われた。これは一つの例ですよ。

「私はこれを誇っています。これを捨てろなんて言われたら、プライドがゆるしません」というのが人間の誇りなんです。プライドを捨てなさい。死ぬ時は何も、プライドなんか役立ちません。私はそれを言いたいです。

私が今日持ってきた本『癒されて旅立ちたい』はホスピスの方がお書きになった本で、癌病棟の二人ほどの方のお世話をしてきた人で末期癌の人のことを綴っておられる。末期癌の人たちは何を望みにして生きているか、末期癌の人たちは何が心にかかっているかと。(註『癒されて旅立ちたい』ホスピスチャプレン物語、沼野尚美著。チャプレンとは施設で働く宗教家のこと。本書は、薬剤師であった著者

が神学校に入り、米国の大学院で心理学・カウンセリングを学び、帰国後チャプレンとしてホスピス患者二千人の心のケアに携わる生と死のドラマである)

皆さんも、癌というようなことになってみないと、そういう心境になれないというのは、ちょっとさびしい。癌ということになりますと、多くの場合は、余命一年あるいは三ヶ月とか、そういうことを言われます。それからということでは、残念です。せつかく健康をいただいて、人のためにも働ける、世の中のため、人のために尽くせる、そういう地上の命をいただいている間に、本当のものに目覚めさせていただいて、神さまに乗り移ってもらおう。キリストは乗り移りたくてしようがないんですよ、みんなの上に。そして一緒に行きたいと。「旅は道伴れ世は情け、一緒に行こうよね」と、これがキリストの御思いですから。キリストが何をしてくれたのかというと、

「十字架でああなたの汚れ全部を私がきれいにしたから、心配いらん。あなたのことが好きやねん、あなたのことを愛しているよ」

「そのようなことを私は人から聞いた事がない。愛しているよなんて言われたことがない」

「いや、だから、私はあなたのことをとびきり愛しているんだよ」

と。だから、キリストの所へは、病人だとか、この世の中で捨てられている人がたくさん行ったんです、その当時。行き場がない人たちがみんなキリストの所へ行った。自分を何者かと思っている人はみんなキリストを拒んだ。今だって、変わらないです。

## 孫の旅立ち

ここに弘野慶次郎先生がいらっしゃいます。私と年齢は7、8歳ほどちがうけれども、共通点は二人とも孫を亡くした。弘野先生は2008年、一昨年の5月12日に萌花ちゃんという本当に素晴らしいお嬢さん、お孫さんを交通事故で亡くされた。9歳でした。そのお気持ち。孫つて可愛いんですよ、もちろん親にとって子供は可愛いにちがいないけれども、孫となったら孫で、格別かわいいですよ、おじいちゃん、おばあちゃんには。それを亡くされた。

私の方は昨年(2009年)の12月14日、石田翔くんというんですけど、22歳6ヶ月でした。病気で亡くなりました。翔くんは生まれて6ヶ月くらいいた時に福山型先天性筋ジストロフィーという病気だった。だから、ずっと車椅子生活でした。本当に朗らかな明るい子でね、周りをいつも明るくしてくれて、周りの人にいつも「ありがとう、ありがとう」と言っていました。自分で何もできないですから。イエスキさまと一緒にすわ、

「私は自分では何もできない」

と言われた。だから、「ここがかゆい」と言ったら、そこを掻いてやる。「この手をこちへやって」と言ったら、手を動かしてあげる。だんだん、年と共に身体が萎縮してきましたから。そういう病気をかかえながら、自分を病気と思っていなかった。そういう身体だと思っていた。

ところが、肺炎とか、そういうった呼吸器系の病気にも、特に冬にやられるんですね。何度か入院を繰り返しました。去年も1月に肺炎か何かで入院しまして、2月の末に帰ってきました。それから

しばらくずっと調子がよかったです、特に5月18日の22歳の誕生日には素晴らしく元気でした。ところが、8月にインフルエンザがはやりました。6歳下の弟、衡平くんというんですが、衡平くんが先にインフルエンザで救急車で指定の病院へ運ばれた。2日遅れて今度は、お兄ちゃんの翔くんが運ばれた。衡平くんは無事に帰ってきましたけれども、翔くんはその治療過程で身体の圧迫がひどかったようです。インフルエンザは直ったんですけども、身体全体に負荷がかかりすぎて、とうとう8月14日に一旦死にました。40分間、蘇生術を施されて、それで生き返ったんですけども、もう相当全体がやられていましたから、意識が戻るまでかなり時間がかかりました。一か月ほどたちまして、片一方の耳が聞こえるようになったし、少し身体全体がよくなってきたので、自分がつもお世話になっている宇多野病院という——身体障害の子供たちをお世話くださる病院——そこへ代わって、二か月ほどそこに入院した。そして、11月21日に私たちの家に帰ってきた。あしかけ24日間、そこで家族と一緒に暮らしました。だんだん心臓が弱ってきて、とうとう12月14日にこの世の命が終わったんです。22歳6ヶ月でした。

私は、弘野先生と一緒にです。この世で終わって、火葬場で焼かれて、それで終わりなんて、絶対に受け入れられない。そんなものであるはずがない。亡くなって一年半ほどもたつてから、萌花ちゃんのメッセージが弘野先生たちに届けられた。お友達が、萌花ちゃんから聞いたメッセージを伝えるべきかどうか、迷っておられた。それで、神父さんに相談したら、「ぜひ伝えなさい」と言われて、伝えられたのが一年半後なんです。それは何かというと、

「萌花は今、幸せよ。今、本当に幸せよ。お友達がいっぱいいるよ」

というメッセージなんです。なにか音楽会に行ったそのお友達が演奏中に突然そのメッセージを聞いたわけです。音楽会とは何の関係もない。でもはつきり聞こえてきたという。それを手紙に書いて、お渡しくださった「萌花は今、幸せよ」と。旅立った翔くんも本当にそのように、身体が焼かれて骨になって、それで終わりなんて絶対に言えない。

イエス・キリストがあのような素晴らしい姿で現れてくださった——復活と呼んでますけれども——あれはこの地上の命と違った別次元の生命に変貌されたわけです。この三次元の命は「肉」と呼んでますね、肉体の命。それから霊のからだ、霊の生命、これは我々と次元が違いますから、わからない。正にそこから来られたお方だから、そこへ帰って行かれた。その時、手ぶらで帰られたのではない。地上を大掃除して、我々の罪を全部背負いきって、そして天に昇られた。別れる前に弟子たちに言われた。

「私は天の所へ、あなた方のために住まいを備えに行く。用意ができたらまた迎えに来るよ」ということを言っておられる。ヨハネ伝14章のところですよ。そして、

「決してあなた方を孤児にはしない。必ず帰ってくる。父なる神さまと私と聖霊という姿になって、これがいつもあなた方と一緒にいるんだからね」

ということを約束された。そのようなイエスさまのところへ翔くんが行ったはずなんです。私は、翔くんは今願うんです、

「いつペン現れてくれよね。向こうへ行けば会えるのはわかっている。けれども、それは待ちきれんからね。一年後や二年後で、向こうへ行けないと思うよ。まだまだ仕事があるし。だから、せめて翔くん、きみの方から現れて、しばしでいいから現れてきなさい。向こうへ行くまで、そうしてよね」

と(笑)。だから、イエスさまもそうやって、たくさんのいろんな人に現れなされたんです、必要の方に。その願いは叶えられるかどうかわかりませんが、絶対に私は翔くんは輝いてキリストの御業のお手伝いをすると思う。萌花さんもお手伝いすると思います。

### 失われた神の子

幼児のような心でないと、向こうの国へ行けない。キリストが言われているんです、福音書の中で。弟子たちは、「誰が一番偉いか」とか、くだらんことを言っているんですよ、本当にもう腹がたちますよ、あの記事を見たら。イエスはこれから天国へ行くその十字架にかかって死ぬというお話をしておられるのに、「誰が一番偉いか」とか。イエスが復活されて、「誰が右大臣、左大臣になるか」とか。イエスは言われた、

「そういうことではない。この世では偉い人は威張っている。しかし、神の国はちがう。一番偉いものは誰かという、一番仕えるものだ」

と。イエスは弟子たちの足を洗われた。ヨハネ伝の13章に出ています。それは、自分が神から出て



また神に帰る。その時が来たということを悟られて、そして、たらいに水を汲み、手拭いをぶらさげて、一人ひとりの弟子の足を洗っていく。ペテロは

「もつたいない、もつたいない、そんなことはだめです」

「いや、洗わなければ、お前とは縁切りだよ」

というようなことを言われた。

「私がお前を洗うから、お前と繋がりができている」

と、そう言って、席に戻られた。

「私のやったことがわかるね。あなた方は私のことを先生、主と呼んでいる。そのとおりだ。主であり先生である私が本当に一番卑しい仕事——人の足を洗うという仕事——それを自らやった。あなた方もそのようにやってほしい。誰が偉いかなんて言うのではなくて、一番低い所に身を置く者、一番仕える者、それが天国で一番偉いんだよ。お手本を示したんだから、ぜひそうやってほしい」

と。人がとかく「神さまがいる。いや、いない」とか、そんなことを議論したって始まらない。人々の生きている姿、お互いに深く愛し合っている姿、威張ってない姿、嬉々として喜んでいる姿、いろんな苦難があっても耐えている姿、そういう姿を通してしか神さまのことはわからない。キリストは、

「私があなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい。それによって、あな

た方が本当にキリストの弟子だということを世間の人は認めるだろうから」

と。「奇蹟の業をしろ」とも、「何か他のことをいろいろしろ」とも、「論文を書け」とも仰っているんですよ。漁師たちですもの、出身は。だから、

「互いに仕え合いなさい。争いがあってはいけない。私はお前たちの所へくだってくる。

人に教えてもらわなくても、聖霊という神さまの霊があなた方一人ひとりに大切なことをみな教えるから、大丈夫だよ」

と言う。これは私たちにはありがたいではありませんか。仏教の方はわざわざインドや中国まで行って、経典を持ってきて仏教をお広めになった。いろいろな修行をなさった。我々は居ながらにして、この聖書一つあれば、それを本気で読めば、そして本気で祈れば、

「イエスさま、そうなんですね。あなたの仰ったことは本当なんですね。私の生活の中で実証してください」

と。本当に一人ひとりにということ。外には太陽が輝いています。「ああ、太陽が輝いていますね」と、それだけではだめです、自分が出て行って太陽の光を浴びなくては。

「あつ、光はあなたにも届いている。私にも届いている。先生にも届いている」

と。一人ひとりに太陽の光線が届いている。そして熱を感じる。そうでしょ。キリストはそういうお方なんです。一人ひとりを本当に生かそうとなさっている。

ですから、ここに比較的、高齢の方がたくさんいらっしゃいますから、高齢の方はこれからの人生、

あと何年残っているのか知りませんが、これからの人生を輝くものにしてください。それはキリストという光が入ってきたら、輝くんです。

「私は世の光である。光が来たのに、人は光を拒んだ」と。これが罪なんです。

「光が来たら、光を受けたい、光を浴びて輝こう」

と。お月さんがそうでしょ。満月が皓々と輝きますね、あれは自分で輝いていてのではない。太陽の光を浴びて、そして皓々と輝いている。私なんかが見たら、お月さん自身が輝いているように見えませけれども、あれは太陽の光を浴びて輝いている。皆さんも、キリストの光を浴びて輝いている。自ずと周りの人のそばに居れば、

「あの人の所に行ったら、何かあったかい、何かいいものが流れてくる。あの人の所に何か寄り添いたいんだよ」

と、そういうことがあるでしょ。そういう人柄というものですけれども。内なる人が形作られていく。外なる人は変わらなくても——いや変わっていきます——だんだん衰えていきます。外なる人はどんどん衰えていきます、どんな小野小町も。これはもうしょうがない。でも、そういう皺くちゃになっても、中から皺くちゃをぶつ飛ばすような光が現れてきて、素晴らしくなる。マザー・テレサなんてそういう方だと思っただけです。アッシジのフランシスコもそういうお方だったんでしょ。いろんな素晴らしいお方がいらっしゃいますよ。

それは皆さんお一人お一人が神の子なんです、本当の意味で。キリストにぶつかるとは、失われた神の子なんです、迷子なんですよ。

「各々勝手な道を歩んできた」

と書いてある、羊みために。羊飼から離れて勝手な道を歩んできた。目覚めて、本当の羊飼いのキリストさまの所に帰っていく。

「よき牧者は羊のために生命を捨てる」

と仰った。やっぱり、ヨハネ福音書というのは凄い。本当に読んでいて楽しい。始めは、バックグランドをご覧になっていいですよ。ユダヤ人というのはどんな民族でどうなっているかと。でも、だんだんバックグランドを抜きにして、大事どころだけを読んでいく。その中に入っていく。

万のことに時あり

私は何十年もこの道を歩んできたけれども、その私ですら、聖書に触れないで一週間、聖書を閉ざしてきますと、やはりにぶりますよ。この地上だけの世界におりますと、にぶります。頭で考えなくなってきましたよ、「神の国とはどんな所だろうか?」とか、いろんなことを考える。それはいかんです。

私の聖書は、『文語訳聖書(詩篇付き) 1967年』と書いてあるけれど——色がいつぱい塗ってあります——これを開いていると、もうウワーツと甦ってくるんですよ、本当に。「おもちゃの兵隊」

という話がありますね、夜中に歩きだすような。だから、絶えず触れてなければだめです。触れていて初めて生き生きしてきます。読むのに、長い時間は要らないですよ。本当に自分の大事だと思ふところを拾い読みなさったらいい。そして、主イエス・キリストとの交わりを——霊の交わりです——心で思うこと、向こうが思っているらしやること、その交流ができてくれば、自分の中に何か確信のようなものが湧いてきますから。

「そうだ、間違いない、これでいいんだ、絶対まちがいない」

と。だから、これは宝の書ですよ。旧約聖書は、その中の大事な所だけでいい。あれはユダヤ人の民族の歴史書ですから、その民族の歴史書の中に普遍的なものが散りばめられている。それをキリストは引つ張り出された。だから、同じ旧約聖書を読んでも、全然読み方がちがっている。ヨハネ福音書5章の所にユダヤ人との問答で、

「あなた方は聖書(旧約)の中に永遠の生命があると一生懸命に調べている。でも、この聖書は私のことを証している。キリストのことを指し示している。

さつきのイザヤ書もそうです。キリストを指し示している。

ところが、その本体である、ご本尊である私がここに立っているのに、何だかんだと言つて拒んでいる。来ようとしない。『モーセ、モーセ』とばかり言っている。何でやねん」ということを言っておられる。

「神は霊なれば、拝する者も霊と真をもつて拝せよ。生かすものは霊である。肉体的なもの

のを生かすものは、肉体的なパンがあるけれども、それ以上のものが大事なんだよ」と。本当にこの天の世界の消息を詳らかに語ってくださり、表してくださったのが福音書ですから。そういう角度から読んでいきまないと、全然読んだことにならない。

それともう一つはやつぱり、それぞれのお方にとって、「時」というのがあるような気がします。「私はいくら読んでもわからない」

「そうか、それではもう少し時を待った方がいいかも知れないね。『万のことに時あり』という。無理は禁物ですから。時をください、その時を示してくださいと祈られたらいいと思ふ」

と。私は、無理するのは嫌いです。イエスというお方は実に伸びやかで自由自在、ツバメのように。ツバメは軌道がありません。列車は軌道があります。脱線したらえらいことです。でも、ツバメは本当に自由に——さっきの「千の風」の歌のように——自由自在です。そういう本当に自由の世界に私たちをお招きくださっている。

たとえば、身体は不自由でも、身体は閉ざされていても。限界がありますね、我々は地上では。本当にいろんな限界があります。でも、

「それを越えた本当の世界に、あなた方を羽ばたかせてあげよう、そこで一緒に生きよう。地上に居る間にそれを味わったら、天上へ行ったらもっと凄いからな」と。そういうことを私は思っている。

もう時間がありませんから、エッセンスを申しますけれども。「神の思い」と「人の思い」(イザヤ55・1〜2, 6〜13)は、

「東と西が離れているくらい、天と地が離れているくらい、神さまの御思いと我々人間の思いとは違う。違うんだから、その御思いはどうやったたらわかるのか。キリストというお方を送りこんだよ。この方はいわばメッセンジャーだ」

と。高校野球の試合を見ていると、よく、伝令が行きますね、ベンチから高校生の選手へ。あれですよ。神さまから送られてきた伝令なんです、イエス・キリストは。

「私の思いは何一つ入っていない。父なる神が『話せ、しゃべれ!』と仰ったことだけをしゃべっている。『なせ!』と仰ったことをやっている。私は自分からは何もできない。無能力者だ」

とはつきり、無能力宣言をしておられる。だから、後期高齢者も心配いらんですよ、だんだん能力がなくなってきましたけれども。イエス・キリストも無能力者ですから。神さまが乗り移って、いろんなことをなさってくれる。

そして次に、「へりくだる霊に宿る神」(イザヤ57・15)。いと高き所にいらつしやる方が一番低い所においてくださる。イエス・キリストは一番低いヨルダン川の川底に身を沈められた。高い所に傲然と留まっているような神さまはまだいかなのです。この方は一番低い所に一緒に来てくださる。いと小さき者、いと弱き者、病める者、苦しめる者、その人のそばでじつと担っていてくださって、

慰めを与えてくださる。心砕けたる者の所においてきてくださる。これが神さまの姿です。

そして、「悲しみに代えて喜びの油を」(イザヤ61・1〜3)。これもイザヤ書の61章1節から3節はルカ福音書の中でキリストが引用しておられる。

それから、「キリスト受難の秘義」(イザヤ書53章)、これはさきほどしました。「神の求め給うもの」(ミカ書6・6〜8)は、「慈しみと憐れみ、御意を行うこと、それだけだよ」と。

それから、詩篇103篇「人の思いを超えた神の慈しみ」(詩篇103・1〜13)。これはちよつと開いていただきましょうか。

「わたしの魂よ、主をたたえよ。わたしの内にあるものはこそつて、聖なる御名をたたえよ。

「内にあるもの」、これは「五臓六腑」といいます。

<sup>2</sup>わたしの魂よ、主をたたえよ。主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない。

これは旧約聖書の中の詩なんです。

<sup>3</sup>主はお前の罪をことごとく赦し、病をすべて癒し、<sup>4</sup>命を墓から贖い出してください。慈しみと憐れみの冠を授け、<sup>5</sup>長らえる限り良いものに満ち足らせ、<sup>6</sup>驚きのような若さを新たにしてください。主はすべて虐げられている人のために、<sup>7</sup>恵みの御業と裁きを行われる。<sup>8</sup>主は御自分の道をモーセに、御業をイスラエルの子らに示された。<sup>9</sup>主は憐れみ深く、恵みに富み、忍耐強く、慈しみは大きい。<sup>10</sup>永久に責めることはなく、



とこしえに怒り続けられることはない。<sup>10</sup> 主はわたしたちを、罪に応じてあしらわれることなく、わたしたちの悪に従って報いられることもない。<sup>11</sup> 天が地を超えて高いように、慈しめは主を畏れる人を超えて大きい。<sup>12</sup> 東が西から遠い程、わたしたちの背きの罪を遠ざけてくださる。<sup>13</sup> 父がその子を憐れむように、主は主を畏れる人を憐れんでくださる。」

いいでしょ、これ。正にこのとおりの姿をキリストが表わされた。

### 山上の説教

次に新約聖書のマタイの福音書も味わっておきましょう。「山上の説教を始める」(マタイ5:1-12)と書いてあります。

「イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄つて来た。<sup>2</sup>そこで、イエスは口を開き、教えられた。

<sup>3</sup>「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。

<sup>4</sup>悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。

<sup>5</sup>柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。

<sup>6</sup>義に飢え渇く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。

<sup>7</sup>憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。

<sup>8</sup>心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。

<sup>9</sup>平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。

<sup>10</sup>義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。

<sup>11</sup>わたしのためにのしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。

<sup>12</sup>喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」(マタイ5:1-12)

これは「山上の垂訓」とか言われていますけれども、なにも「垂訓」といってたてまつらなくていい。自分がそのような身になった時に、たとえば、悲しんでいる時に、自分が本当に悲しんでいると、ここにくるんですね。

「あなたは悲しいよな、今は。私があなたの慰めとなるからね。大丈夫だよ」

と、こう響いてこなくて。命題を掲げているのではないんです、これは。

「私があなたをそそうするね」

と、いつでもイエスは

「私をやってあげる」

という、それが隠されていると受けとってください。

「あなたは心が貧しいね」

と。「心が貧しい」というのは、「自分に誇るものが何もない」という姿。何もさもない根性ではない。「あいつは心の貧しい奴だな」というのは悪い意味です。そうではなくて、神の前に——「俺は」という意味ではない——謙<sup>へりくだ</sup>っている姿です。「心が貧しい」というのは、イエスがそうなんです。

「私は何ものでもない。私ばかりっぽだ」

と仰った。からっぽなイエスさまに神さまが100%に宿ったでしょ。そのように、私たちも己<sup>おのれ</sup>をサムシング「何ものか」としていただため。ナツシング、何もないんですよ。なかなか日頃はそう言えない。でも、本当に何もなしになったときに言えるでしょう。私はそう思っている。

「何もかも失いました、からっぽです」

「いや、それでいいんだよ。失ったものは必ずまた回復される時がくる。あなたは命があつてよかつたね」

と。大震災とかを考えてみてください。

「命があつてよかつたではないか。必ずいいときがくる。悲しんでいる人、私が慰めてあげるから」

と。柔和な人々。本当に柔和な人々は争いを好まない。殴られても殴り返さないうです、柔和な人々というのよ。

「柔和な人々は幸いです。私も同じ目に合っているよ。それで私は本当にあなたの慰めになるからね。大丈夫だ。地を継ぐよ」

と。「地を継ぐ」は「御国<sup>みくに</sup>を継ぐ」でもいい。この世の価値観というのは反対でしょ。富める者、幸福の絶頂にある者、猛々<sup>たげたげ</sup>しい者、権力のある者、睨<sup>にら</sup>めば震えあがるような恐い存在。ところが、神さまの方はそうじゃない。全く逆です。天と地が遠く、東と西がかけ離れているように。神さまが尊ばれる世界、神さまの価値観と世の価値観は、こんなにもちがう。だから、その神さまの価値観にぶつかって、

「ワーツ、良かった、これで救われた!」

と言える人は幸いなんです。でも、「神なんか、くそくらえ!」と言っているあいだは、それだけで終わり。この世の生が終われば、「ジ・エンド」です。向こうの世界へは行けません。でも、これを本当に、「そうだ、そうだ、本当にそうなんだ」と。

「義に飢え渴く人々」、義<sup>よ</sup>しいこと——もつと言えは、神さまの義——神の義は何なんだろうと。

「神さまの前に何が義<sup>よ</sup>しいのだろうかと、一心に祈り求める人は幸いですよ、満たされるよ」

と。宗教改革のマルチン・ルターがそうなんです。あれはカトリックの修道僧として模範僧だった。すべての戒律に従う。ところが、心に平安がない。神さまは審判<sup>さば</sup>の神だ。この審く神の審判には自分はとても耐えられない。ルターは

「神さまの義の前には自分はとても耐えられない」

と言って、独房の中でとうとう気絶してぶつ倒れていたという。それがある人が見つけて、助け起こして、やっと命を取り留めたという。そのくらいルターは義に飢え渴いていた。しかも、ルター

にとつての義は、「審きの義」であつた。神さまの審きの義にぶつかったら、誰も何ともならん。ところが、目覚めたんです。

「神の義は福音のうちに現れた。信仰より信仰へ至らしめる」

という、ローマ書3章です。神の義は福音に現れた。「福音」というのは、「イエス・キリストが十字架にかかつて生命を与えてくださった」

これが福音、よろこびのおとすれでしょ。ここに神の義が現れた。そこでガラリと変わったんです、ルターは。人間の側の何ものでもない。全く恵みとして、価なき、それに価しない人間に恵みとしてくださった。これが神の恵み、福音、生命である。何か自分の側に根拠があつて、

「これだけいいことをやってきた、これだけ修行を積んできた、だから、ください」

と、これは報酬なんだ。一等賞、二等賞とありますね、金・銀・銅とか、いろいろあります。これはそれぞれやった功績に応じて与えられる。それなりの論理がありますよ、その世界があります。この世はそうです、みんな表彰台なんです。みんなそれを目指してやっている。

でも、神さまの表彰台は違うんですね、全然ちがう。御意を「はい」と受けとる者が喜ばれる。義というのは人を救う義、その義でなくては。人を救うような義である。しかも、その義というのは、キリストほどの義人はありません。キリストは神さまに逆らつたことはいつぱんもない。キリストは我々とどこがちがうか。神さまがすべて、神さまの御意が100%。我々は1%くらいが神さまで、あとは己おのれなんです。その義人そのものであるキリストが十字架にかかった。

「私はこの義をあなた方に与える、生命を与えるよ」

と言つた。そこにルターは気がついた。だから、本当に神の前の義というものを真剣に祈り求める人は必ずそこで大転換を起こす。

内村鑑三もそうだった。あの人も武士の流れの人だから余計真剣なんです。アメリカへ渡つて、皿洗いをしたり、看護師になつて病氣の人にいろんなことをやつたけれども、やつぱりだめだつた。とうとうアマースト大学のシーリー総長という方の所へ行つて、

「だめです、どうにもなりません」

「内村君、君は自分を見過ぎてている。キリストを見てごらん。イエスを見なさい。何も求めておられない。砕けた心、助けてくださいという心だけで充分だよ」

と。『求安録』とか、『キリスト信徒の慰め』とか、そういった小品の中に内村鑑三の心の軌跡が描かれています。本当にそうやってキリストの前に無条件降伏して、

「ああ、イエスさま、何も要らなかつたんですね、この心だけを差し上げればいいんですね」

と言つた時に、サーツと平安が流れてきた。「まるで江戸城開け渡しの心境」という。將軍慶喜が江戸城を開け渡して、政権交代ですから幕府が握つていたものを朝廷へ返したでしょ。すっかり責任をお返ししたわけです。今までは、自分が自分の主として自分で自分をコントロールして、神さまに喜ばれる道はいかがかと、一生懸命でやつていた。けれど、

「何も要らん。そのまんまからっぽになつて、己自身を差し出す。これで良かったんだ」

ということに気づかされる。それが、内村鑑三が新たに生まれた瞬間なんです。「歴史秘話ヒストリー」、そのとき歴史は動いた」なんて、できるかも知れんですよ(笑)。皆さんも、そういうヒストリーを作ってくださいね。まあ冗談ばかり言ってますけれども、楽しいでしょ。そういうことです。「憐れみ深い人は幸いである」

と。そうですね。心の「清い人」に神さまが映ってきます、その人の心の鏡に。「平和を実現する人」はもちろん神の子です。こんなふうにして、キリストが告白しておられる世界、神さまの世界というのは、この世が尊ぶような価値とはだいぶ違う。そのことにまず気づいていたいただきたい。そして、それを生き抜いていただきたい。

「そこへ行きたいです、あなたの弟子にしてください!」

と言ったら、絶対に拒まれませんか、キリストは。入門自由なんです。その席がいっぱいあるんですよ、キリストの御許には。私はもう弟子にならしてもらって、本当にうれしいと思っています。キリストは私のお師匠さんで、私は弟子です。それから救い主です。私は救われました。私の恩人です。この身を献げて惜しくない。キリストというお方は本当にすごい、私にとっては掛け替えのない、そういうお師匠さんであり、恩人であり、救い主であり、もうすべてなんです。

### キリストとの直結関係

「キリスト教」ではありませんよ。「キリスト」という霊的な人格、その方との直結関係です。皆

さん、そういう人間に縁を結んでください。それが群れをなして、教会をお作りになっても結構ですよ。でも、「教会」が何ものかではない。キリストというお方と皆さんとがもう切っても切れな。ちょうど赤ちゃん、臍の緒でお腹の中で結ばれていますね。そして、お母さんのものが流れています。そのように今度は、イエスさまという方と皆さんとが一つ一つの見えない絆で固く結ばれている。切っても切れない絆で結ばれている。そして、日々、一緒に生きていく。道を歩いても、御飯を食べていても、眠っていても、いつも一緒にいてくださる。お遍路さんというのは、「同行二人」〔註：四国八十八ヶ所を巡る遍路の笠に書かれる。同行は信仰を同じくするの意。二人とは本人と弘法大師の二人を意味し、常に弘法大師と共にあるの意〕とかいって、いつも一緒に歩いてくださる。イメージはあれでいい。いつも一緒に生活してくださる。

南原繁という、昔、東大の総長がいらした。それが本当に貧乏だった。やっぱ四国の方です。その時、お母さんが南原さんを、子供をおぶりながら、どこか親戚の所へ借金の話をしに行かれる。その時に歩きながら、

「お月さんを見てごらん。お月さんはどこまで行っても一緒に来てくれるでしょ。人は見なくて誰からも顧みられず見捨てられても、お月さんはいつもの一緒にいてくれるのだろ」

と言った。それがずつと三つ子の魂に留まっていた。それが南原さんの著作の中に出てくる。ああいう話は感激します。昔はねんねこで背中におぶってかぶせて、寒い所を歩いて行くわけです。

「人が見てなくても、天の神さまは見てらっしゃるよ、お月さんは見ていてくれるよ」



とか、そういう魂の語りかけが三歳の時にしみこんで、それがずっと続くそうですね。  
今の日本でそういうことがなされているのかどうか、それぞれのご家庭でなされているのかどうか。口を開いたら、

「塾へ行つてらっしゃい!」

これでは可哀相ですわ。興味のないものに、無理にやれと言ったって、残酷なんです。興味が湧いたら、何でもやりますよ、子供は。待っていてやればいい。

「そんなことしてたら、一流の学校へ行けん」

「一流なんかならんや、一流て何やねん、いったい」

と、私はそう言いたい。根本的に間違っていますね、日本の価値観は。おそらく神さまから示されないといけない。だから、仏教の方だつて、本当のことを仰ればいい。どの道の方も、この地上のことではない、地上と別次元の、天の次元からの語りかけ、それを受けとつて、それで生きようと。共通項は絶対にあるはずなんです。永遠の生命、愛。搾取しない、与える。キリストは、

「受けとるよりも、与える方が幸いだ」

と言われた。人に親切にする。平凡なことです。それを何か難しい宗教に仕立て上げたなら、これは間違いなんです。誰でもが受けとれる、誰でもが歩める道が本当の道です。そうでしょ。我々、日常の御飯だつて、どなたも御飯をお食べになります。どなたもお水をお飲みになる。どなたも安らぎます。どなたも空気を吸っておられます。無条件でしょ。

「一定の知識がなければだめだ、一定の何々がなければだめだ」

なんていうのは、これは限定されたものです。困るんです。神さまはそんなお方ではありません。幼児にだつて、三つ子の魂にだつてわかるんです、直観的にわかる。愛というものと、そうでないものとの違いがわかる。愛の人には、子供はなついていきますよ。そうでない人には、子供は近づきません。動物もそうです。動物を好きな人は、犬が人に吠えようと、「あれは悪い人だ」なんて言うんですよ、「いい人には絶対に吠えない。噛みつかれたら噛みつかれた人が悪い」くらいに思っているでしょ(笑)。あれは困りますけれどね。そういう嗅覚というのかな、直感というのかな、そういうのが人間に備わっているはずですよ。欲があればだめです、騙されますよ。欲がなければ、本ものと偽者(にせもの)の見分けがつかはずです。

もう時間が参りましたから、ぼちぼち終わりにさしかかりたいと思います。でも、終わりはないんですよ。10時間でも20時間でもしゃべりまくれるし、1時間でも、30分でもよろしい。味わってもらいたい。こつをつかまえてもらいたい。それでいい。こつは何か。「無条件」です。

「砕けの魂、心砕けた者は幸いだ」

という。幼児の魂。そして、心開けない人は、「開いてください」というお願いを持っていく。

「私は砕けないので、砕いてください」

というお願いを持っていく。渴いている時は、水がほしいですものね。渴いていたなら、絶対にほしい。

「ほしいんです、智慧をほしいんです!」

と言えがいい。福音書でキリストに出会っている人はみな平凡な人ですよ。

「永遠の生命が湧きでる」

なんて言われたあのサマリアの女なんて、身持ちがわるくて、昼の12時頃にこのこ、バケツをひっさげてやって来た。イエスは井戸端で休んでおられた。そして、

「ちよつとすまんけど、水を飲ませてくれんかね」

と言われた。

「あなたはユダヤ人でしょ、私はサマリア人や。喧嘩している間柄ではありませんか。それなのに、言葉をかけてくれたんやね!」

と言う。そしたら、イエスさまは、

「私は何者か、私の正体を知ったら、あなたの方から水をくれと言いつ出すはずだよ」

「何言ってるの、この井戸は深い。素手でどないして水汲み上げるんや」

「いや、この井戸の水を飲む者はまた渴く。けれども、私から流れてくる水は永遠に渴かない。無限に溢れ出るよ」

「そんな水をくださいよ!」

と言いつ出した。

「あなたは、五人も夫がおつたが、今の夫はまた別の人やろ」

「あなたは預言者や!」

と言いつて、すつとんで行った。そして町の人を連れてきた。

すつとんで行く前に、その女はかなり知識がありますね、

「ユダヤ人のだんなさん、あなた方はエルサレムで礼拝すると言っているが、我々はこのゲリジムという山で礼拝する。どっちが本まなの?」

と聞いた。そしたら、

「この山でもあの山でもない。霊と真<sup>まこと</sup>とをもつて拝する。神さまを拝するのに、この山だとかお寺とか教会とか、限定はない。神は霊である。霊なる神さまを礼拝するというのは、霊と真とをもつて神さまを拝する。これが本当の礼拝だ。そういう人たちを神さまは求めておられるんだよ」

「ほう、あなたは預言者だ、すごい!」

「いや、私はそれだよ」

と言われたのに、その女の人は水瓶を置いたまますつとんで行って、

「えらい人に出会ったよ、これはひよつとしたら、預言者かもしれない」

と。「ひよつとしたら預言者」どころか、キリストなんですもの。町の人がぞろぞろやって来た。そして、イエスに、

「ぜひ、自分たちの所へ来てもらいたい」

と町の人たちが頼む。二日間、その村にお泊まりになった。そのあとの結末はどうかというと、サ

マリアの女に、

「初めは、あなたが言ったから聞いた。けれども、もう今はあなたは関係ない。私たちは  
じかじかにこの方からお話を聞いた。これは本ものだと思った」

と、そう言つて告白している。ヨハネ伝の第4章——ニコデモさんの次のところ——「こういう世界です。何も知らなかった人が、二日間、イエスからじかじかに話を聞いて受け入れた、信じた。ユダヤ人は信じない。ユダヤ人は、サマリヤなんて異教徒と結婚して混血になった。だから、排除した。ユダヤの血統ではないとだめだと。肉、血統を重んじた。イエスさまはそんなことは問題になさらない。混血であろうが何であろうが、

「霊と真をもつて拝する」

これでいい。ユダヤ人、異邦人であろうと、何であろうと、そんなことは関係ない。みんな神の子ではないか。霊と真をもつて拝する。場所の限定もなければ、何の限定もない。「霊と真をもつて拝せよ」と、それだけでいい。そういう無条件の世界なんです。そして、心を開いてくれる。

そういうことですので、どうぞ、皆さん、今日をぎっかけにして、先入観をぬきにして、わかんところはすつ飛ばされて、楽しい好い言葉だけを拾い出して、それを嘔みしめる。スルメというのは、嘔みしめると、味が出てくる。昆布もそうです、嘔みしめると味が出てくる。嘔みしめ嘔みしめ、味が出てくる。それを血肉とする。そういう角度から読む。

私は、ヨハネ伝からお読みになればいいと思う。それから今度は、ルカ伝に行きます。それからマタイ伝に行く。マタイ伝はユダヤ的な要素がかなり入り込んでいますから、我々にしっくりこない所がたくさんあります。

旧約聖書なんかはますますしっくりしない所がたくさんあります。けれども、さっきのイザヤ書とかミカ書とか、素晴らしい所があるでしょ。掘り出しものがありますから、その掘り出しものを旧約聖書から掘り出していくんです。

そして、新約聖書がピカリと光っていますから、その中の——マタイ伝なんかのユダヤ的要素が強いところはカットしていい——本ものだけを食べていく、咀嚼していく。そして、皆さん自身の本ものに化せられていく。化体されていく。神さまの御霊、御言、生命、それが化体して化合物になつていく。もう分離しなくなる。どの部分がイエスさまで、どの部分が奥田かわからなくなるくらいに一つになる。恋愛もそんなもんですか。

「私のものはあなたのもの、あなたのものは私のもの」

と。「あなたのものは私のもの、私のものは私のもの」、これではない。二者一体、そうでしょ。それが本当の愛の奥義なんでしょう、なかなか成れませんけれどもね。違う人間が一つになるなんて、土台、無理な話ですよ。無理だけれども、神さま(キリスト)は一つになろうとしてくださっている。そのために出張命令をもらって来てくださったのではないですか。その気持ちを受けとっていき。これが御意なんです。それでは、このへんで終わることにいたしましたよ。

## 祈り

主イエス・キリストさま、天にいらつしやる父なる神さま、今日は奈良のこの会場におきまして、皆さま方と一緒に、あなたの世界を味わうことができました。天の次元の世界をひっさげて、イエスさま、あなたが下ってきてくださった。本当に心を尽くし、力を尽くし、誠を尽くして、語り、御業をなさってくださいなのに、当時の人たちはことごとくそれに躓き、逆らい、あげくの果ては、十字架につけて殺してしまおうという、とんでもないことをやりました。それでも、あなたさまは十字架の上から、

「彼らを赦してやってください。彼らは自分のしていることがわからないからです」

と。そして、弟子たちに対しては、

「必ずお前たちの所へ帰ってくる。そうしたら、もう絶対お前たちを孤児にはしない。一緒に住処を共にするんだ」

と。そして、本当にそのお言葉とおおり、あなたは弟子たちの中に住んでくださいました。そして今度は、東洋にいる私たちの中にも、あなたは今、お住みになってくださっております。あなたにとつては、民族の違いなど問題ではありません。地球が一つであるように、あなたはどの民族をも等しく愛し給う。等しく生命を与えようとなさっていらつしやいます。

どうか、全世界の人が目覚めて、宗教争いを止めて、覇権争いを止めて、この次元の違う天の次元、天の生命、永遠の生命、これを無条件に受けとって、お一人お一人が生まれ変わって、神の国の住

人として共に手を取り合うことができますように、導いてください。その日まで共に働かせてください。主イエス・キリストの尊い御名を通して、この祈りを御前にお献げいたします。アーメン。